

ポロブドールで見たKalau Rau

広電観光大阪Aコース 菊岡秀多

“ピッピッピッピーン、只今から11時26分丁度をお知らせします。ピッピッ…”ラジカセから絶え間なく時報が流れている。これは、出発直前になってから電話局に勤務する某氏に無理矢理頼んで作ってもらった電話報時用テープの再生音である。

1983年6月11日11時26分、いよいよ第二接触だ。熱帯の強烈な太陽は今最期の輝きを見せている。と、次の一瞬チカッ!と光る…ダイヤモンドリングの始まりだ。アッと思う間にあたりは暗影に包まれる。丘の下に待機中のバスや警備のジープ等一斉にクラクションを鳴らす。どこで鳴っているのかサイレンの音もけたたましい。

一方、丘の上ではカメラのシャッター音が凄しい響きをたてている。待ちに待ったジャワ日食。しかもここポロブドールの丘は快晴である。私たちはこれを見に、撮りにはるばるやってきたのだ。5分7秒間の黒い太陽…その殆んどが一人二役、三役で望遠鏡やカメラを操作している。頭上には妖しく光るコロナ、プロミネンスも二つ、三つ。金星や火星、水星が見える。青々と眼下に広がっていた椰子畑は暗黒のジャングルと化し、所々に点在する水田がコロナの光を反射してか鏡のように光って見える。実に奇妙な、神秘的な美しさである。

6月9日付のインドネシアタイムズ英語版に興味をひく記事があった。鈴木治夫氏が訳されたが、要約すると、「伝説では、悪魔の巨人カララウは或る時、神に変装して神々の宴にもぐり込み、永遠の命の水ティルタ アメルタ サリを呑んだが、運悪く太陽の神パタラ スルヤと月の神パタラ チェンドラに見つかり、守護の神パタラ ウィスヌの知るところとなった。守護の神は矢を放ち巨人の首をはねてしまったが、永遠の命をもった巨人の首は永久に太陽と月の神を恨んで追い続ける」こととなり、「時に巨人の首は太陽の神を呑み込み、正午近くに昼が夜に変わろうとする。しかし、この首は最高7分間しか呑めないため再び昼間に戻る」の

だそうである。

千年前に作られた世界的な仏教遺跡ポロブドールを横に見ながら、ふとそんなことを思いだして眺める真珠の輝きは感慨無量の趣きがあった。

ポロブドールの丘は、面積約1ha余り、段々畑風の草原である。前々日の下見では既に4m四方程度の区画整理が行なわれていたが、前日のスコール、天候不安定の状況から各社ツアー共敬遠組が続出し、収容250名の予定が、広電隊大阪A・B合わせて約50名、JTB隊20数名、他に外国人10数名といった陣容で、観測場所の選択は自由で、場所に関しては申し分なく、空の状況も1973年快晴のアフリカ日食よりも優れていたともいわれている。

私の日食観測は、オーストラリア、ケニアに続く3度目の正直で幸いにも快晴に恵まれたジャワ日食となったが、強烈な熱帯の太陽はカメラや望遠鏡に若干のトラブルを発生させた事が遺憾であった。でも…“It's no use crying over spilt milk”で、夢は既に次のニューギニアへ、ボルネオへと進んでいるのである。

観 測 地



ダイヤモンドリング

